

関西広域連合協議会有識者分科会の議事概要について

- 1 日 時 平成 24 年 11 月 9 日(金) 10:00~12:00
- 2 場 所 関西広域連合本部事務局大会議室
- 3 出席者 秋山会長、新川副会長、北村委員、加藤委員、山下委員、西田委員
橋爪紳也特別ゲスト(大阪府立大学 21 世紀科学研究機構教授)
中塚本部事務局長、桑野本部事務局次長、立石本部事務局計画課長

4 議 事

(1) 事務局説明(事務局)

- ・次期広域計画の策定に係る検討体制及びスケジュールについて

(2) 意見交換

- ・広域連合の目指すべき姿及び中長期戦略について

(主な発言内容)

○会長

- ・本分科会は、次期広域計画の大きな方向性を決めるため、中長期的な戦略、連合が目指すべき姿など有識者の皆様の御意見を伺うために開催している。今年度は3回程度開催する予定である。本日は連合についての御意見をご自由に発言していただき、2回目はそれを具体的に展開し、3回目でまとめていきたい。
- ・日本経済の現状は、6ヶ月連続で景気動向がマイナスであり、日本経済は後退局面には入っている。海外シフトが進み、国内より海外投資が増えている、企業も雇用を減らし、採用をも減らしている。
- ・こういった日本経済の中で関西が最も悪い。節電の影響、中国の輸出依存度が高い、東日本の復興需要がないなど様々な影響があるが、根本的な原因は、本社機能の東京移転、関西のリーディング・インダストリであるプラズマ・液晶の衰退、さらに、関西が圧倒的シェアを誇っていたリチウムイオン電池、太陽電池の世界シェアの急落が影響している。現状のままでは、関西経済は落ち込みが大きく、将来が全く展望できない。
- ・これらの主要な要因は、企業のリスクヘッジ、政府の対応の遅れもあるが、企業企業の生産構造変革の遅れが原因である。日本企業は大企業が下請け企業を系列化する一貫生産で行っているが、多様なニーズの変化を伴う現代に対応できていない。一方、韓国企業やアップル社などは、自社の工場を持たずに、世界から部品を集めて生産する方式で成功している。
- ・関西を再生するためには、関西の各地域がもっている地域特性である「多様性」を「連携」させることが重要。たとえば、観光では、各地域にある歴史的、文化的遺産だけでなく、工芸品・祭りなどの特徴的なものに光を当てて、広く内外にみてもらう。
- ・また、イタリアのボローニャでは、底辺の中小企業である職人企業が独自の技術と水平展開するネットワークづくりを行い、相互に競争しながら強調する下からのモジュール方式をとっている。
- ・それを支援するため、官は産業界と一体となって世界中から情報を集めて分析し、次のシーズ、売れ筋商品の開発支援などを行う「情報センター」を設立して

いる。

- ・ さらに、こうした活動を支援するITシステムとして官自らが各企業の技術・部品のデータを集める「データバンク」を設置し、市民が誰でも定額で自由にインターネットが利用できるようにしている。これは、民間でやると特許などの関係で難しいので官でやっている。
- ・ このように地域を活性化するためには、産官学、それに市民も一体となる必要がある。そのために、先ほど例示としてあげたほかに、次の観点を皆様と議論してまいりたい。①関西ブランドをどうしていくのか、②医療、防災、福祉、環境分野の諸施策を進め、安全で住みやすく多様に富んだ地域作り、③世界に通用する人材、高度なプロデュース機能をもつ人材などの幅広い人材育成、④女性の社会進出の強力な推進。女性の社会進出が高いほど成長率が高くなることがIMFの報告でもあげられている。⑤道路、関西空港、ミッシングリンクの解消など社会資本整備について、第2フェーズとして次期広域計画で取り組む必要があるか。⑥エネルギー問題をどうしていくか。⑦北東アジアなどロシアも含んだアジアとの連携をどうしていくか。最後に、⑧地方分権の強力な推進を行う。地方分権が進んでいる国は、経済が成長している。
- ・ これらのことを踏まえ、日本をリードする強い関西を作っていきたいので、皆様の御意見を伺っていきたい。

○特別ゲスト

- ・ 関西広域の現状認識として、国境を超えたメガリージョン間の競争にさらされていることを認識するべき。現在は、いわゆる「第4の都市化のフェーズ」に入っている。新たな価値を創造する圏域にするため、関西のこれまでの考え方を徹底的に見直してグレートリセットすることが必要。
- ・ 20年から30年スパンで、中長期的な関西の姿をイメージし、ビジョンをもち、バックキャストで、次の3箇年を考えるべきである。また、20年、50年先の関西のあるべき姿を可視化し、重点化すべき分野と施策を考えるべきである。
- ・ 世界では、人類の総人口の過半が都市に集中、従来の都市と農村の関係は、アジア諸国にあっても崩れている。一方、日本では、少子・高齢化、生産人口の減少、製造業の空洞化など課題がある。問題解決型のソリューションも必要であるが、世界的な新たな都市文明の到来を契機として、従来にない価値を都市に付与し、新たな都市を創造するという視点にたったソリューションが求められる。
- ・ アジア各国では、上海を含む長江デルタや、香港や広州を含む珠江デルタのようなメガリージョンが、ここ数年、あいついで誕生している。関西が世界と競争することを考えるとき、世界の中でどのようなメガリージョンを創造するのか、という視点が必要。
- ・ 今までのように一律に平準化した横並びの「都市化」ではなく、これからは、個々の都市が自ら考え、内発的な創造を果たすことが重要。あわせて、外部から優秀な人材を招き入れる創造的基盤の充実も必要。内発的な圏域の再生と、外部

からの投資や人材の流入を促す施策の拡充を、同時並行で図ることが重要。

- ・ 限られた資源をどこに投資するか。これからの都市化は、分散させたものをも一度集積させる第4の都市化になってきている。「グレートリセット」が必要。
- ・ ソウルや上海はデザイン、釜山は映画産業、光州はアジアの文化首都と光関連産業、杭州はコンテンツビジネスというように、中国や韓国の主要な都市圏では、ベンチマークを定め、世界のどの都市のどの分野でどのような競争を果たしてゆくのか、明確なターゲティングとマーケティングのうえで、次世代の基幹産業となる文化産業の育成を実施している。関西も同様に戦略性を持ち、スピード感を持って、次世代を担う産業や人材の育成を進める必要がある。
- ・ 伝統を活かした再創造を促すため、文化政策と産業政策の間に十分に橋をかけ、一体となった都市産業政策が必要である。

○委員

- ・ 第4の都市化で農村部の位置づけをどうするか考えないと計画に書くのは難しい。都市と農村の新しい関係をどうしていくか。
- ・ 新しいものを作り出すときは連携が必要。どのような連携の制度をつくり、どのような連携の質を保つのか、計画を作るときに重要な概念である。

○委員

- ・ 世界と競争するのは関西にとって非常に重要である。交流するアジアとどうアライアンスして取り組んでいくのか、このような視点が重要である。広域連合内で連携することも重要であるが、アジアや世界とグローバルな連携・競争関係を広域連合が持つのも重要である。
- ・ そのほか、人材の問題。海外から優秀な人を引っ張ってくるようなことも重要である。
- ・ 制度的な問題。規制緩和やまちづくりは誘導していくという視点も重要。また、関西のインフラは、道路などブツブツと途切れている。シームレスに移動するのは不可能に近い。
- ・ ブリッジングが重要。海外との連携の具体的な形をつくってどう提案できるのか。例えば、関西広域の巨大なクラスターを台湾やシンガポールと結びつけ、コリドー（回廊）を提案するのはどうか。そのために、台湾やシンガポールに出る飛行機は安価にしてみる、大学機関に巨額な投資を行うなど、外に向けた提案が出てくるとおもしろい。
- ・ 農村の活性化を図るために、郊外に投資する仕組みをつくってはどうか。

○委員

- ・ 関西という圏域として、何を「売り」にしていくのか、エリア全体として大きな目標を共有することが必要。
- ・ ただ、難しいのは関西広域として何を売るべきなのか。狭い意味での観光や芸術ではない。新しいものを作り出さないといけない。これが課題である。

- ・ 関西が蓄積している遺産をいかし、そのまま保存するのではなく、これを大胆に組み替えするのが課題。
- ・ 社会的・行政的な制度を作り直さないといけず、迅速な対応が必要になるが、既存の制度が邪魔をしている。

○委員

- ・ 20年、30年先に何が大切か。どのような哲学を持って考えるか、どのような思想のもとで考えたかなど、哲学と思想が重要。
- ・ 都市と地方をどう考えるのか。中山間地域が壊滅している。何が一番問題かというところ農業が産業と得ていないことである。地方をどのように位置づけるかは、農業を産業として成立させる取組が重要である。

○委員

- ・ 関西の再生を考えると、それぞれの地域が競争力と持続化を共通の目標をもってやる。この理念は、むしろ数十年は変わらないと考えている。それぞれの地域の固有のやり方がある。関西広域で考えてみたとき、トータルな環境・経済をどう考えていくのか、他のグローバルな圏域とどのように考えていくのか、と考えるときに関西の姿が見えていくのだろうが、なかなかクリアにできていない。
- ・ 今の日本の衰退局面で何ができるのかということ考えていけないといけない。

○特別ゲスト

- ・ 世界で日本は経済面でも文化面でも、良い印象を抱いてもらっている国々が少なくない。現状は良いイメージを活かしていけそうだが20年、30年先はどうか。日本のブランド力を、関西が代表し、世界から良い圏域のイメージを持ってもらうようにすることが重要。世界に対して関西の魅力を訴求しないと、優秀な人材はいままで以上に、関西から離れていくのではないかと危惧している。
- ・ 若くて優秀な才能を持っている人材は、関西を離れて世界に拠点を置いてやっている。関西圏域の次世代を支えるキーパーソンを各分野で育成していかないといけない。
- ・ 農村をはじめ、地域ごとに付加価値を作ることが必要であり、付加価値を創造するプロデュース機能が大事。すでに企業が農村に入って成功している事例もある。
- ・ 行政制度に関しては、政治の仕事であり、中央での議論にまかせる。
- ・ アジアとの連携では、分野ごとに戦略を練り、連携地域を模索する必要がある。
- ・ 関西は文化首都圏であるべき。双眼構造の概念であるが、関西の「ほんまもん」を活かして付加価値をつける。たとえば、お茶、古典、酒、世界遺産など各テーマを掲げ、単体ではなく広域で連携する取組が重要である。

○委員

- ・ ブリッジングは関西広域連合で非常に大事。広域連合でも韓国大慶圏との協定

を交わし、環境政策や産業政策など連携している。

- ・ 農業と林業の再生は日本の大きなポイントである。林業においては、エネルギーという視点から、木質バイオマスの活用と結びつけて活性化させている例もある。エネルギーの地産地消みたいな考えをと詰めていくと、21世紀型の都市に対する農村のイメージができるのではないか。
- ・ 強い関西というイメージであるが、強さの中身を明確にする必要がある。

○委員

- ・ 関西圏域はすべてがつながっていて、そのダイナミズムを作っていくのが大事であり、硬直化してしまうとだめになってしまう。このダイナミズムを関西全体の中にどのように作っていくのが大事である。関西全体がダイナミックに動いていると思われるようなイメージの魅力を提案できるような広域計画であればいいと思う。

○委員

- ・ 今日の議論で、強さ、人を引きつける・あこがれる魅力を持たないといけないというのは皆さん共通の認識である。これがまさに競争力になる。ただ、この中身を真剣に詰めないといけないということである。

○委員

- ・ 広域計画は3年計画であるが、有識者分科会で考えた理念・考え方・中長期的な関西の姿を、この計画に入れるのか、入れないのか、におわすのか、におわさないのかなど、真剣に選択肢を考えないといけない。これは次回以降の課題である。
- ・ 広域連合では、既に分野別の計画を策定して動いている。これらの計画と広域計画との関係を考え、広域計画を策定するようにしないとイケない。
- ・ 都市と農村、関西地域で持っている様々な地域的な個性や特性というのを、この計画の中でどのように生かし、共通のコンセプトでまとめるのが課題。都市と農村は対立軸ではなく、一体的なものとも考えることも指摘されていた。
- ・ 文化などを連合としてどのように考え、具体的に考えていくのか。これをもっと中身があるものにするための仕組みや場づくりのようなことが広域連合の期待の一部になるのかもしれない。ただ、これの具体的な戦略をどこまで議論するのが難しい。
- ・ 関西広域連合の役割を向こう3年、その先にどのようにしていくのが課題。次期広域計画で3年後以降のことも考え、見通しも含めて議論していきたい。
- ・ 連合はどういったガバナンスを作っていくのかも重要である。現状では、構成府県内市町村からの信頼がない状態なので、この関係をどうしていくのかも課題である。

○会長

- ・ グレートリセットするために、未来への強い意志を持たないといけない。特に

若い人に意識を持たせるべきである。

- 関西のイメージは、結果として出てくるのか、ある程度意図的に出すのかわからないが、広域連合が色々活動する中で、各府県がやっていたことと別の1つの関西として新しいダイナミックなものを作ればと思う。
- 各地域の特性を生かしながら、なおかつ、連携をとっていくのは中々難しい。それぞれの構成府県に事務所があるが連携がしにくいという問題がでていたので、皆さんに議論していただきたい。
- 連携についても色々な意見がでた。企業間の連携、海外との連携、都市と農村村との連携、地域間連携など様々な連携を行うために連合が取り組んでいってはどうか。
- 2050年ぐらいの長期的な視点を持ちながら、これを反映するかは別だが、次の3年間を考えて次期広域計画を策定していければ思う。